



特集・静岡の再生の切り札

日本平の「カジノ」構想について

最近のテレビ・新聞には「マカオのカジノ」の繁栄ぶりが屢々取り上げられております。

8月のSHINGO SCOPEでも紹介しておきましたが、1年ごとにマカオの表情が変わっていると言われております。

嘗てはポルトガルの植民地として、そこに設備された遊技場は将に蛙鳴蝉噪の表現がぴったりの騒がしさであり、街の様相もまた不穏な雰囲気醸し出しておりました。

ところが1999年に中国に返還されて以降のマカオは、その様相を一変させ、今や、東洋の「ラスベガス」として台頭してきたのであります。

恐らく近い将来、カジノの「カジノテーブル」には多くの日本人も並ぶ場面に出会うでしょう。

「カジノ」を媒体とする都市政策

さて、わが国がこれまで「カジノ」を封鎖してきた根拠は、他国にない競輪、競艇、そして極く大衆向きのパチンコ店が存在し、カジノを認可する必要もないとの判断からと理解します。

しかし、近年、観光でわが国を訪れる諸外国のお客さまには、これら日本固有のギャンブルには馴染めず、世界共通の遊び場である「カジノ」の設置を希望する声が出始めております。外国からの観光客受け入れのためにも発想の転換の時を迎えたのであります。

そんな折、私は「静岡市がカジノを媒介とする都市の活性化策」と題して、この度、小冊子に

纏め、勇気をもって提案したところであります。

日本の「カジノ」事情について

近い将来、わが国にも沖繩をはじめ全国数か所に「カジノ」が誕生するはずであります。

その「カジノ」が齎す「人・物・金」の流通は、コンベンションシティを標榜する本市にとってまたとないチャンスであります。

この提案書の骨子は『日本平山頂に「カジノ」&ホテルを誘致する』という奇想天外とも云うべき私案であります。

更に特徴的な点はこれを実行する企業体は日本を代表する企業群はもとより、同時に、ラスベガスの企業をも導入して、日米の合弁を目標論んでいるところでもあります。勿論「カジノ」という「打出の小槌」がこの莫大な投資を可能にすることは、自明のところであります。

日本平山頂は最高の「カジノ」適地である

ご案内のように、静岡市が本州の「ど真ん中」に位置し、陸(新幹線・東名高速道路)・海(豪華客船が立ち寄る清水港)・空(富士山静岡空港)の全ての交通網に恵まれ、また予定される山頂は嘗て「平原の部、第一位」に輝いた富士山を借景とする景勝の地であり、更にカジノ設置の絶対条件でもある「市民生活との隔絶」は申し分のないところであります。

幸い日本平ホテル、静岡鉄道、日本平ゴルフ場など、山頂部およそ20万坪の地権者のご理解のもとに、私はたった独りで乱暴ではあるがこ

の壮大な計画を提案致します。

勿論、日本平山頂部には県立自然公園、風致地区、都市計画公園、農業振興地区、国指定の「名勝」など様々な規制があることは充分承知の上で立ち上げました。

形骸化する地方都市の流れの中に

率直に言つて、この街の将来を鑑みると、これまで屢々このSHINGO SCOPEにも記載してきたように本市は極めて厳しい諸課題を抱えている処であります。人口の減少、産業の空洞化、都市の没個性化など枚挙に遑ないほど課題ばかりが降り注ぎ、一方では行政も手を拱いて対応する術を知らず、ただ時の流れに任せているばかりであります。

一大コンベンションシティへの道

幸い、この「カジノ」誘致が実現すれば、次に私が描く構想は、およそ40万坪になんなんとする大谷の調整区域の開発であります。

20年前、私はこの地域に米国のオーランドを参考とする一大レジャー産業の誘致を脳裡に描いて、仮称「東静岡インターチェンジ」を都市計画決定したのであります。

勿論、「ギャンブル」を媒体とする政策提言とは、選挙の洗礼を受ける立場の私として、如何なものかと思われるでしょうが、誰もが「武士は食わねど高楊枝」を気取って、奔放気ままな自己の主張や提案を控え、「待てば海路の日和あり」に期待し、その結果今日の危機的状況を迎えてしまったのかもしれない。

これまでも私は様々な企画やアイデアを提言してまいりましたが、今回は敢えて厳しい批判も覚悟の上で提言する次第であります。

「丸子と手越」の周辺 ③

歴史ある「徳願寺」を訪ねる

幼い頃、近隣に住む仲間たちと向敷地にある徳願寺を尋ねるようになりました。

誘いの文句は、恐らく、時が秋だけに、黄色に稔る「みかん」の誘惑がその動機であったでしょう。勿論、徳願寺所有のみかん畑はありません、そこに至るまでの長い山道の脇に実る黄金の果実は、殆どが向敷地の農家のものであります。

しかし、実際歩いての向敷地はナント遠く離れた所でしょう、子供心には間もなく日本海が見えるのではないかと思いつつ、足を引きずり、私たちは歩き続けました。そして最後の急勾配の山道に入る頃には、もう二度と来ないと心に決めて、「徳願寺」の山門をくぐった事を思い出します。

大窪山徳願寺と北川殿

奈良時代、行基が開いたと言われる真言密教の道場であったが現在は曹洞宗のお寺であります。境内には長い歴史を物語るように苔むした五輪の塔や墓石が多く、嘗ての栄華が偲ばれるところであります。

特筆すべき徳願寺の歴史は今川氏親(義元の親)の生母北川殿の菩提所であることあります。

文明8年(1476年)、今川義忠は塩買坂(現在の菊川市)で不慮の戦

死を遂げた時、義忠の嫡子で、僅か6歳の童王丸(氏親)と義忠の従兄弟小鹿範満との間に家督相続の争いが勃発、義忠夫人・北川殿は、その後、北条早雲の協力を得て、今川氏親が7代目を継承するところとなりました。

今川文化の終焉

この時から、公家の出身であった北川殿の影響もあり、駿府を「公家文化」を基調とする「小京都」として模造するところとなりました。

文武両道に優れ、繁栄を極めた今川文化の痕跡は、その後間もなく、義元が織田信長に桶狭間で敗れた後、徳川家康との協議によって、武田信玄がこの駿府を統治する処となりましたが、その

一寸一言 私 雑記帳から

今年もやって来る大道芸の季節

「大道芸」の名付けの裏に

今どこそ全国、誰でも「大道芸」といえば、どんなものか想像できますが、これが企画された当初、平成2年当時は「パフォーマンス」の呼称で準備されていきました。その時代、「大道芸」に対するイメージは多くの人々にとって「文化、芸術」の世界とはかけ離れ、寧ろ侮蔑的な「川原乞食」の認識が一般的でありました。

際、「信玄は絢爛たる今川文化を欲しくて駿府を手に入れた」と後々、誹謗されることを嫌い、放火したのであります。炎は西風に煽られてたちまち駿府は焦土と化し、今川文化と古今和歌集をはじめ貴重な財宝や建造物は塵芥に帰してしまっただけでありました。

ところで「北川殿」の呼称は、現在では想像し難いところですが、家康による安倍川の大改修が行われる以前、その本流は梅が島方面から下って、宮ヶ崎でUターンし、浅間神社の石鳥居から臨濟寺方面を経て麻機から巴川に注いでおりましたが、この川が賤機山の北側を流れる事から「北川」と呼称しておりました。恐らくこの川の付近にお住まいであった処から「北川殿」と呼ばれたとてことであります。

そのため「パフォーマンス」は馴染みのない表現とは思いつつも、市観光課は横文字で立ち上げてまいりましたが、愈々準備が佳境に入った段階で、若者を中心とした実行委員会に継承され、その段階で「大道芸ワールドカップ」と決定したのであります。

第16回のワールドカップを目前にする今日、新聞、テレビは迷うことなく、日本語で「大道芸」と紹介しておりますが、それは当時の実行委員会が「大道芸」の言葉を世界共通語にしたいとの思いから選択したイベント名だったのです。

彩時記

どんぐりコロコロ

木の葉が色づくこの季節、足もとの落ち葉の間に、丸いどんぐりの実を見つけることができます。一口に「どんぐり」といっても、ナラ、クヌギ、カシの実など、ブナ科のいろいろな木の実全体を指しています。

一本の木に、多いものではなんと1万個ほどのどんぐりが実をつけます。大半は、リスやノネズミ、カケスなど野生動物のごちそうとなりますが、地面に落ちたどんぐりは、落ち葉のあたたかな布団に守られて、動物たちの目や冬の寒さから身を守り、春に芽を出します。

人間にとって身近な木の実でありながら食用にはできず、そのせい子供頃は夢中で拾ったどんぐりも、大人になってしまうとあまり手にする機会がないのでは?可愛い形をしたせっかくの自然の恵みを、アクセサリーやオブジェにしたり、和食の箸置きなどに使ってみるのもおもしろいものです。

また最近、地球環境保全の面からも、ブナなど広葉樹林の大切さが見直されています。一粒のどんぐりが、未来の豊かな森づくりにつながっていくのかもしれないね。

母、天野登美 逝去いたしました

去る9月12日、90歳の長寿をもって私の母・登美が逝去しました。葬儀に際し多くの皆様のご会葬を頂き、誠に有難うございました。ここに謹んで生前のご厚誼に対し厚く御礼申し上げます。